

字幕翻訳者

戸田奈津子さん

Right Time Right place

—— 適切な時に、適切な場所に

「字幕翻訳者」と聞いて多くの人が真っ先にその名前を挙げるのではないだろう。大ヒットした映画にも、感動した大作にも、夢中になったハリウッドスターの映画にも、戸田奈津子さんの名前があった。だが、そこに至るまでの道のりは決して平坦ではなかった。

PROFILE >

【とだ・なつこ】1936年、東京都出身。津田塾大学英文学科卒業。生命保険会社で秘書を1年半勤めた後、英語関連の通訳・翻訳のアルバイトをしながら字幕翻訳者を目指す。1970年公開の『野生の少年』で字幕翻訳者としてデビュー。1980年に公開された『地獄の黙示録』では、監督のフランシス・フォード・コッポラの来日時に通訳をした縁で、監督から同映画の字幕担当に推薦される。以後、字幕翻訳の第一人者として、『ゴッドファーザー』や『E.T.』『インディアナ・ジョーンズ』『タイタニック』『ミッション・インポッシブル』など、1500作品以上を手掛けてきた。1992年、第1回淀川長治賞受賞。

——字幕翻訳者として数多くの作品を手掛けられてきた戸田さんですが、初めて映画をご覧になったのは10歳の時だそうですね。

戦後の焼け野原から復興し始めた時代で、人々は娯楽に飢えていましたからね。木造バラックの汚い映画館でも満員になるくらい、日本中が映画にハマっていました。

子どもだった私は母にくっついて映画館に行つて、背伸びしながら観ていましたが、初めて観た外国映画の衝撃といったら、カルチャーショックなんてもんじゃないですよ。映画の中には見たこともない町があつて、ステキなお話があつて、別の星にきたような感じ（笑）。おもしろくて、すぐに夢中になりましたね。

——以来、映画大好き少女になり、高校生の時には、第二次世界大戦直後のウィーンを舞台にしたキャロル・リード監督の映画『第三の男』を、50回以上ご覧になったとか。

子どもの頃から映画はかなりの本数を観ていましたから、好きな映画とそうじゃない映画の区別ははつきりといっていました。その中で、この映画は決定的に素晴らしかったですね。

この映画は一生で今日しか観られない
 と思って観ている。その切なさ
 と言ったら、今とは絶対的に違います。

——どこが素晴らしかったのですか。

すべてです。「これぞ映画！」という映画でした。カメラワークがいかにも演技がいいとかだけじゃなくて、すべてがいい。映画は何百人という人たちが関わって作り上げる総合芸術ですが、この映画は史上最高の1本だと思います。

——その当時から、字幕というものを意識されていたんですか。

今だったら、DVDを借りてくれば1本の映画を何百回でも自宅で観ることができると。でも当時は、映画館にお金を払つて観るしかないから、ワンチャンスと思つて観るわけです。この映画は一生で今日しか観られないと思つて観ている。その切なさと言ったら、今とは絶対的に違います。

字幕は確かにありがたいけれども、食い入るように映画を観ていると、それについて考える余裕なんかなかったですよ。

——字幕翻訳者という職業を意識されたのは、いつですか。

大学4年の時ですね。それまでは字幕翻訳が職業だなんて思つていませんでしたから。卒業後の進路を考えた時に初めて

「自分がいつも読んでいる字幕は誰かが翻訳しているんだ」と気づいて、あの仕事に就くにはどうしたらいいのかと調べました。

調べると言つても、今みたいにインターネットなんてありませんし、字幕翻訳の世界は全くと言っていいほど外に知られていない。それで、映画業界に詳しい人に話を聞いたら、おいそれと入れる世界ではないということがわかりました。

——当時、字幕翻訳はどのような方がされていたのでしょうか。

もとをたどれば、字幕翻訳は映画会社の中で外国語ができる社員にやらせていたんです。その後、その方たちが独立して、字幕翻訳はフリーランスの仕事になりました。

外国映画には必ず字幕翻訳者、誰々が出てますよね。英語の字幕ではいつも清水俊二さんという名前が出てくるから、私は電話帳で住所を調べて直接手紙を出しました。「弟子にしてください」と書いて。

それで、後日、清水先生は実際に会つてくださったのですが、「字幕をやりたいとは困ったねえ。難しい世界だから」と言われて、がっかり。でも、とりあえず字幕翻訳の世界は新人には全く門戸が開かれていないということはわかったわけですね。

——それで、どうされたのですか。

私は幼い頃に父を戦争で亡くし、母と2人きりでしたから、自分でパン代を稼がなければならぬ状況にありました。



年賀状や暑中見舞いには、必ず「字幕翻訳者になる夢はあきらめていません」と書き添えていました。

る仕事などをしていました。アニメだけじゃなく、『隠密剣士』という実写の子ども向け時代劇なんかもやりましたよ。これがオーストラリアですごく当たってね。今でもオーストラリアで『隠密剣士』と言えば知ってる人がいるくらいです。

——パン代を稼ぐために翻訳のアルバイトをされながら、清水先生との糸は切らさないようにされていたのでしょうか。

私にはそれしかありませんでしたから、字幕翻訳につながる糸は。追っかけみたいなことはしなくなかったんで、年賀状や暑中見舞いを出す程度でしたけど、必ず「字幕翻訳者になる夢はあきらめていません」と書き添えていましたね。

——その後、清水先生の仕事を手伝われるようになったんですね。

それは字幕翻訳の仕事じゃないですよ。そうじゃなくて、台本が来ない映画が時々あるんです。そういう映画の英語のセリフをヒアリングして、書き起こすような仕事です。

——そういった仕事から、字幕翻訳に少しずつ近づいていけたのですか。

小さな一歩ずつが積み重なって、まずは映画関連の仕事ができるようになりました。でも、それで字幕翻訳の仕事が自動的に入ってくるわけじゃありません。

——その当時、字幕翻訳者は全員男性だったそうですが、何人くらいいらっしやったのでしょうか。

10人足らずです。字幕翻訳が必要な映画って年間400本くらいしかないんですよ。だから、10人もいれば十分だったというのがその背景です。男女差別うんぬんではなく、実力があればそれはちゃんと認められます。フリーランスって皆そうじゃないですか。フリーランスのカメラマンだって、腕が良ければ女性でもちゃんと認められるでしょう？

——実力がものを言う世界だと。

そうです。字幕翻訳が下手か上手かは興行成績に影響しますから、映画会社もやっぱり上手い人を使いますよ。

——清水先生は字幕翻訳について教えてください。

わからないことがあって相談に行けば、ちゃんと答えてくださいました。

昭和30年代当時、通信社や出版社などには英文を和訳、和文を英訳という仕事がたくさんあって、私はアルバイトでそれらの仕事をしていました。とは言っても、字幕翻訳者になる夢をあきらめたわけではありません。

——テレビ放送が開始されたばかりのアニメ番組を、輸出用に翻訳する仕事もされたそうですね。

『鉄腕アトム』の日本語の台本を英訳す

——清水先生の言葉で特に印象に残っているのは？

一つ例を挙げれば、語尾の使い方ですね。字幕翻訳では、語尾の使い方がとても重要なんです。例えば、女性のセリフで「I LOVE YOU」とあったとすると、う。これを「愛してるの」と訳すか「愛してるわ」と訳すか、たった1字だけど、この「の」と「わ」では大違い。画面で見えて、全然意味が違ってきます。そういう現場でなければわからないことを、教えてくださいましたね。

——戸田さんが初めて字幕翻訳をされた映画は、フランソワ・トリュフォー監督の『野生の少年』という作品だそうです。納得のいく仕事はできましたか。

とんでもないです。今だったら字幕翻訳の練習をしたければ、DVDを借りてきて、画面に出てくる英語を書き写して台本を作ることができるでしょう。そこからセリフの秒数を計って、1秒3〜4文字の字幕に翻訳する練習が自宅でもできます。

——今なら、いくらでも教材はあります。

そうです。でも、昔は何もありませんで

10年も待ったのに、
こんなものしかできないのかと、
ものすごく落ち込みました。

した。原文の台本も手に入らなければ、音声もないから、秒数を計ることもできない。映画館で他人の字幕を見ることしかできないんです。字幕を見て「あんなに短くなるのか」と思うけれども、実際に自分でやってみることはできません。仕事の依頼があつて初めてやるのができたんです。

——練習する機会もないとは厳しい。

字幕って画面との相性があるんですよ。水と油の字幕は見えていても絵とちぐはぐで、本当に読みにくい。それにリズムが重要です。英語のセリフってリズムがあるでしょ。字幕に翻訳する時も、リズムを意識しないと、画面にのつた時バラバラになつて字が読めてこない。

最初はそんなこと知らないから、めちゃくちゃでした。画面に油がのつていました。清水先生に手を入れていただいて、何とかになりましたけど、そこに来るまで既に10年かかっていましたからね。10年も待ったのに、こんなものしかできないのかと、ものすごく落ち込みました。初めて字幕翻訳ができた喜びなんて全くなかったですよ。

——でも、そこから年に数本の字幕翻訳を

されるようになっていかれたんですね。

1年に1本が2年目は2本になり、3年目は3本、それくらいのペースですよ。それがまた10年続きましたね(笑)。

——字幕翻訳者を目指されていた人は、戸田さん以外にもいらっしゃるんですか。

私の知っている限りでは男性が1人いましたが、途中でやめていかれました。私は独身だったから、先の見えない仕事に賭けることができたけれども、そうでなければ先が見えないものに一生を賭けられないでしょう。

——戸田さんはあきらめずに、字幕翻訳者を目指し続けられたと。

そうです。私は絶対にあきらめませんでした。字幕翻訳だけで食べていけるようになるまで20年間待ち続けていましたが、やめようと思ったことは一度もないですね。

——字幕翻訳者を目指されている間に、通訳の仕事が入ってきたんですね。

字幕翻訳をするのに英語をしゃべる必要はありませんし、通訳をやりたいなんて思ってもいませんでした。

ですが、アルバイトをしていた映画会社で「君、英語ができるんだろ？ 来日する映画プロデューサーの通訳をしてくれ」と。私は「まともに英語をしゃべったことありませんから」とお断りしましたが、気づけば記者会見の席に座っていました(笑)。無我夢中でやりましたが、下手もいところでした。



トム・クルーズをはじめハリウッドの大スターたちからの信頼も厚い

——でも、その後、通訳の仕事がどんどん入ってくるようになったと。

他に通訳をやる人がいなかった。そういう時代でしたから、英語なんてほとんどしゃべったこともない私に、通訳の仕事がきたわけです。

それともう一つ大きかったのは、長年、映画を観続けて、映画に関する知識が豊富だったことです。映画の原題を聞いてすぐに日本語の題名に置き換えられたり、監督

や俳優たちのそれまでの仕事がある程度知っていたことで、心の通った通訳ができたんだと思います。

——通訳をされたことで、映画業界に顔も売れたでしょうね。

今から考えれば非常にラッキーなことでしたけど、その時は死ぬ思いでしたよ。

私の基本は映画のミーハーなんです。ミーハーだから、映画スターに憧れて、会いたいと思うでしょ。どんな人物かそばで見てみたいと思うじゃないですか。そのミーハーの部分があるから、恥をかくのはわかっていても、通訳を引き受けたんです。字幕翻訳の仕事につながるんじゃないかという淡い期待もありましたし。

——40歳の時にはフランシス・フォード・コッポラ監督の通訳もされたとか。

ちょうど『地獄の黙示録』を撮影中でしたね。

——『地獄の黙示録』は、ベトナム戦争時のジャングルを舞台に戦争の狂気を描いた作品でしたよね。

そうです。フィリピンがロケ地で、その中継地として日本に何度か立ち寄られた際に、通訳とアテンドをすることになったわけです。

難航を重ねた映画がようやく完成し日本で公開されるという段になって、この大作の字幕翻訳の仕事が舞い込んできました。私なんて字幕翻訳者としてはまだまだ新人で、あんな大作がくるわけじゃないと思っていましたから驚きましたね。

ずいぶん後になってから知ったのですが、コッポラ監督が日本の映画会社に「彼女は撮影中ずっと私の話を聞いていたから、字幕翻訳を任せてはどうか」と言ってくれたそうです。この鶴の一声で、映画会社もしょうがなく私に振ったのでしよう。もちろん光栄でしたが、いろいろと難しい映画でしたし大変でしたよ。必死でやりましたけど。

——その『地獄の黙示録』の字幕翻訳をきっかけにして、一気に仕事の依頼が増えたそうですね。

手のひらをひっくり返すとは、まさにあのことですね。年に数本しかなかったのが、一番多い時には年間50本くらいやるようになっていました。

『地獄の黙示録』は大ヒットしましたが、字幕翻訳者として私の名前も多くの映画会社の人の目に留まったのでしよう。この子使えるんじゃないかということ、仕事我突然降ってきたわけです。雨あられのごとく(笑)。

——週1本とはかなりハイピッチですね。

1週間に1本ずつじゃないですよ。何社から依頼がありますから、週によつては一度に4本抱えていたり、波が大きいんです。3〜4日仕事が入ったと思えば、一気に何本も仕事が入ってきたりして大変でした。

でも、私は20年待ったんです。ずっと待ち続けて、自分が本当にやりたかった仕事



戸田奈津子さんの生い立ちから字幕翻訳者までの道のり、ハリウッドスターとの交流、趣味の海外旅行などを紹介。映画ライター金子裕子さんのQ & Aスタイルでサクッと読める1冊。『KEEP ON DREAMING』（戸田奈津子、金子裕子著、双葉社刊、2014年10月）

私は20年待ったんです。
ずっと待ち続けて、自分が
本当にやりたかった仕事を
やっともらえたんです。
その嬉しさと言ったら！

をやっともらえたんです。その嬉しさと言ったら！ だから、もうノーなんて言えませんよ。どれほど時間的に厳しくても、依頼された仕事はすべてハイと答えていましたね。タイトなスケジュールでしたけど、締切りに遅れたことは一度もないですよ。

——それはすごいですね。

仕事で徹夜をしたこともないですから。

——一体どうすれば、そんなことが可能になるんですか。

集中力が高かったんでしょうね。それに、この仕事がしたいという気持ちも強かった。時間的には大変でしたけれども、本当に楽しかったですよ。

——仕事はすべて1人でこなされているそうですが、ハードワークの中で病気をされたことはなかったのですか。

親から良いDNAをもらったおかげか、毎日机にしがみついても、病気をしたことはい度もありません。まあ、風邪くらいはひいたかもしれませんが。ただし、どれほど忙しくても睡眠時間は削りませんでしたね。

——戸田さんに仕事が増えた分、他の字幕

適切な時に適切な場所にいたことで、
自分がやりたかった仕事
ができたんだと思います。

翻訳者の仕事が減ったんじゃないですか。

先輩方はご年配の男性ばかりで亡くなる方も多かったですし、その頃はちょうど世代交代の時期でした。「Right Time Right Place」という言葉がありますが、適切な時に適切な場所にいたことで、自分がやりたかった仕事ができただと思います。

——適切な時に適切な場所にいたから、ですか。

人から見れば、私は自分の意志だけで字幕翻訳者になりたいという夢を叶えたように見えるかもしれませんが、ですが、時代の後押しがあったからこそ実現できたんです。通訳の仕事がきたのも、他に英語をできる人がいない時代だったからであって、今の時代なら絶対に私に通訳の仕事なんてこないですよ。

そう考えると、人生には時代の制約があるということをお忘れちゃダメですね。映画で言えば、日本ではこれまでは字幕が主流でしたが、今はアテレコ（吹き替え）が主流になりつつあります。そんな時代に字幕翻訳者になりたいという人は先を見てい

ない。字幕がなくなることはいけませんよ、日本の場合には。でも、そこに大きな未来が広がるわけじゃない。

ですから、自分のやりたいことを考えつつ時代の流れを読んで、先が開けているほうに行かないとね。映画が好きだったら、シナリオライターや脚本家のようにクリエイティブな職種を目指したほうがいいと思いますよ。

——戸田さんが字幕翻訳者を目指されていたのは、ちょうど字幕が必要とされていた時代だったわけですね。

本当に良い映画がたくさん作られていましたし、そんな時代に字幕翻訳の仕事がで



自宅兼仕事場で愛猫3代目のアメリカちゃんと

©kiyoaki sasahara/©futabasha

きたことは、私にとつて幸運でした。

——現在、プライベートで映画を楽しむ時間をお持ちですか。

時間はありますよ。だけど、観たいものがないから、あまり観に行かないです(笑)。年に10本くらいですね、観て良かったと思う映画は。昔は年間何百本の映画全部が良かったんです。そういう黄金時代でしたね。

——そうだったんですね。

クラシック映画をDVDで観ると、どれも素晴らしいですよ。あんなに面白い映画がDVDで観られるのに、今の若い人はなぜ観ないのかな。

ある大学で映画を教えている先生から伺った話ですが、この頃の学生はモノクロ映画を観せると、映写室を出ていくそうです。色がないから、古い映画で時代遅れだと思うんです。カラーじゃないとダメって勝手に決めつけているんでしょうね。何ともしないことかと思えますよ。

——戸田さんは今でも『第三の男』をご覧になるんですか。

私は数えきれないほど観てきたから頭の中ですべてをプレイバックできますけど、

「好きこそものの上手なれ」という

言葉があります、本当にその通り。

好きなものは絶対に大切にすべきです。

それでも観ますね。あのウィーンの石畳の光と影の映像、本当にしびれますよ(笑)。

昔の映画は情緒があつたし、観終わつた後、心に何か残りましたよ。それに比べて、今の映画はゲーム感覚の作品が多いでしょう？ 映画も刹那的になっている。でも、人々がそれを求めているし、その流れは止められるものじゃない。

——それも時代なんですね。

生まれた時代というのは、人の生き方を大きく左右すると思います。ですから、時代の流れをしっかりと見極めつつ、自分の生き方を定めていくことが必要でしょうね。

ただ、そうは言っても、一番のモチベーションは「好き」という気持ちです。「好きこそものの上手なれ」という言葉がありますが、本当にその通り。好きなものは絶対に大切にすべきです。何かが好きという気持ちに勝るものありません。それが前に進んでいくための一番の原動力ですから。

——好きなことを見つけたらとことんやる。

戸田さんの生き様そのものですね。本日はお話をいただき、ありがとうございました。

(インタビュー／ライター 更田沙良)